

新しい悦びの時代へ向けて

NPO法人

くだけかけ会代表

和田重良

1948年小田原市生まれ
くだけかけ生活舎での共同生活（人
生科や農作業）をとおして、青少
年や家庭の生活にさまざまなメッ
セージを送っている。



人生においても、教育を考えるためにも、一人一人にとって「今をどう生き

るか」が大切なことであることは言うまでもありません。

過去を悔んで、また未来を憂いてばかりでは新しい時代を生み出せません。

今日からイキイキと生きましょう。何歳からでも…。

矛五回 よろこんで 大きくなるろう

子どもたちや若者たちといっしょに生活してきた
多くの「願い」は「大きくなってほしい」というこ
とです。「大きくなる」と言っただけで身長のこと
ではありません。人間として大きくなって欲しいの
です。

今年度から「くだけかけ誌」の表紙に「楽しく学ば
う 気持ちよく成長しよう よろこんで大きくなる

う」と三つの項目を挙げてあります。「楽しく、気
持ちよく、よろこんで」と三つ揃うと「いのちの満
足」に出会えるのです。

小さくなってしまふ原因

世の中には「大物」
ぶっている人はたく
さんいますが、本当
に「大きな人」は地位や名声や収入や財産と関係な

い所にいるようです。

人物が小さくなってしまふ元は「能力」や「可能
性」について思い違いをしてしまっているからなの
です。「能力」と言うと「学力評価」のことだけと
思ってしまう、世間受けばかり問題にし、潜在能力
を含めて生きていることを丸ごと活用していくこと
を忘れてしまっているのです。

「可能性」に至ってはそれをまったく信じていない
で教育していることがあるのです。人間（個）の持
っている可能性は無限にあるのです。それを知らず
に枠の中に押し込めようとしたら、ハミ出さないよ
うにしているのです。

その一番ひどいのが、子どもが「〜したい」と言
うと、お母さんが何でも代りにやってあげてしまい
結果だけを与えるのですから、後々、思春期以降に
なって何も自分でできないで努力しない人ができて
しまいます。

「能力」や「可能性」を發揮したり活かしたりして
いけないと、人の心には不満が残り、不平が溜って
しまいます。

「家庭は苗床、学校は道場」と思ってください。苗床
は、温度・水・栄養をバランスよく与えてシッカリ
根や根本を育てるのです。どれも決して与え過ぎて
はいけません。

早く大きくしようとして上から前からひっぱたら根
腐れやヒョロヒョロな苗ができてしまいます。

学校は道場ですから、甘い「教育サービス」で
はありません。商業主義の「教育ビジネス」は決し
て本場の「教育」ではないのです。「塾」と「学校」
はその目的がハッキリ違うのですから、シッカリし
て欲しいものです。学校の塾化は日本を滅びの方へ
導いて行っているのです。

「道場」、つまり「道」（柔道、剣道等々のような道）
を身につける場としての学校の中身は「人生の道」
を学ぶ場であることが原点です。いつの間にか成績
評価の競争の場にしてしまつて「人生の道」である
本場の「教育」を忘れてしまつていっているのです。

世の中をうまく生きてウマイ汁を吸おうなんてこ
とは「教育」の本筋ではないのです。

「あつ そうか」

子どもたちにとつ
て最も大切な「大き
くなっていく」要素
は「あつ そうか」という…：気づきです。実はそ
れは子どもだけのテーマではありません。無限の可
能性を活かす大切なことですから一生の課題なので
す。

簡単なことでもいいから「気づく」ことを大切に
していくと「大きくなって」い
自分で生きる
自分を活かす
自分が活かされる



「両手を使う」

「カーテンを開けると光が入る」
なんていう言葉は当たり前のことだけど、わかって
いても実はその意味は理屈じゃ伝わらない。大人
には説明がつくけど、子どもにはやってもらわな
いのです。

勉強が面白くない子は人生も楽しめなかつたりし
ます。「できる」ということばかり問題にするから
です。ところが「わからない」ということを見つ
けることが勉強だと知つたら「あつ そうか」の連続
です。「わかる」ことを楽しめるからです。

自分には両手があることの意味なんか考えてもな
かった子に「両手を使おうね」と言うと、これまた
人生の味わいというものは新発見ばかりなのです。
「カーテン」と言うのは捉われとか思い込みとかの
比喩です。それは自分で開けることができるのです。
そのカーテンを自分で開けてみると「光」すなわち
「智慧」が湧いてくるということです。人間はどこ
までも大きくなっていくのですね。

のが勉強

「わからないことを見つける

(明照幼稚園にて)